# 今月のおすすめ本

『ヴィクトリア朝ロンドンの日常生活
世界都市の市民生活から食文化、医療、犯罪捜査まで』　【233.33/ア】
マイケル・アルパート /著 、白須 清美 /翻訳（2023）原書房

本書は、ヴィクトリア女王が即位した1837年から治世最初の約20年のロンドンの暮らしについて書かれたものです。当時は、大邸宅に住む貴族からその日の食べるものにも事欠く貧民まで236万を超える人々がこのロンドンにひしめいて生活していました。

本書では、上下水道、住宅事情、疫病、娯楽など当時の生活をかいま見ることができ、筆者は下位中産階級の人々がどのような生活をしていたのか同時代の資料を幅広く活用して、巨大都市ならではの光と闇を描いています。さらに、ロンドンの地図『London A toZ』を片手に読むと、現在のロンドンにリンクできて楽しいです。

## ヴィクトリア期の女性について書かれた本

『庭園家ガートルード・ジーキル　ヴィクトリア朝の女性キャリア』【289.3/ｻ】
川端 有子（2020）玉川大学出版部

『自転車と女たちの世紀　革命は車輪に乗って　ele-king books』【402.8/ｽ】
ハナ・ロス（2023）Pヴァイン

『日本の女性・ジェンダーのいちばんわかりやすい歴史の教科書』　【367.21/イ】
飯田　育浩（2024）グラフィック社

なぜ日本史に登場する女性は少ないのでしょうか。この問いに対して、歴史関係の編集に携わってきた著者が分かりやすく解説したのが本書です。社会制度が整うにつれ女性が社会の表舞台から居なくなっていくという状況もあったようです。

本書は時代毎でなく、「職業」「結婚」「出産」「教育」や「文学」「ファッション」などの12のテーマ毎に日本の女性の姿を読み解いていて、タイトルにあるように、日本の女性史の入門書として最適な本です。またさらに、現代も議論されているテーマの歴史的経緯を押さえることができます。

## この本の後に読んでみては・・・

『性差（ジェンダー）の日本史　新書版』【210.0/ｼ】
国立歴史民俗博物館/監修 、「性差の日本史」展示プロジェクト/編集
（2021）集英社インターナショナル

『論点・ジェンダー史学』　【367.2/ﾛ】
山口 みどり/編著（2023）ミネルヴァ書房